

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 26 日現在

機関番号：34526

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463598

研究課題名(和文) 認知症患者への緩和ケアに関するベストエビデンス研究

研究課題名(英文) Best evidence project on guideline development with multiple evidence end of life care in older people with dementia

研究代表者

今野 理恵 (Konno, Rie)

関西国際大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：10341372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：認知症患者を対象とした緩和ケアに関する研究エビデンスをシステマティックレビューの方法論により検証した。当初想定していなかった種々の課題が見つかり、平成29年度からの新規プロジェクトで継続して取り組むこととなった。これまでの成果としては、認知症高齢者とその家族を対象とした緩和ケアの日本語と英語で出版されたガイドラインのレビュー、認知症患者における痛みのアセスメントツールに関するレビュー、緩和ケア関連の介入検証型研究のアンブレラレビューを行うことができた。これらの成果を次のプロジェクトに取り入れて進めていく予定である。また期間中に3つの国際学会で成果発表を行った。

研究成果の概要(英文)：The project aimed to determine the best evidence related to palliative care for people with dementia and to develop evidence-based clinical guidelines. Since this project encountered several fundamental challenges in addressing multi-dimensional nature of palliative care practice for people with dementia, following new project will take over outcomes from this project in order to strengthen the evidence base of the clinical guidelines. So far, the project have identified status of existing palliative care guidelines published in English and Japanese. The project also identified best practice recommendations for pain assessment tools and effectiveness of palliative care interventions on various outcome measures. We have completed three oral presentations at international conferences.

研究分野：老年看護学

キーワード：システマティックレビュー 認知症 緩和ケア ガイドライン

1. 研究開始当初の背景

認知症は末期にあっては水分・栄養の経口摂取が困難となり、全身状態の悪化から死に至る病である。つまり、がんの併発の有無に関わらず、十分に緩和ケアの対象とされるべき対象であるといえる。しかし、通常のがん領域での緩和ケアと比較して、認知症のある高齢者への緩和ケアは困難な場合が多い。その原因としては、まず認知症患者との意思疎通の困難さがあげられる。緩和ケアに重要な個人の意志の尊重という概念は、認知症患者の多くの場合は、対象の意志確認が他の患者グループと比較して困難な場合が多いため、意思確認には家族の意向に頼らざるを得ない。確実に患者本人の意思による終末期のケアを行うためには、例えば早期段階における Advanced Directive による意思確認が必要であるという認識が世界的に広がりを見せている。さらに、痛みのコントロールなど症状コントロールの分野においては、認知症患者との言語的コミュニケーションの困難さという背景から、看護者側のアセスメント・介入能力の違いにより、ケアの質に大きな差が生じかねないという現状がある。さらに、入院日数削減により、高齢者の看取りの場が、病院から介護施設へとさらに移行が加速しており、看護・介護スタッフへの緩和ケア教育の充実、病院との連携や関連した各種制度の充実が求められている。この状況は当該研究の計画時点でも2017年の現在においても変わらない。

こうした背景から、認知症のある高齢者が持つ特別なニーズとケアの複雑性を考慮したガイドラインの作成プロジェクトを計画した。

2. 研究の目的

認知症患者の緩和ケアにおけるエビデンスに基づいたガイドラインの作成

3. 研究の方法

国内での認知度が低かったシステムティックレビュー研究の手法を採用し、エビデンスに基づいたクリニカルガイドラインを作成、さらに、クリニカルオーディットの方法論を用い、エビデンスの実践への導入における障害因子等を検討し、実際に有用なローカライズされたガイドラインの作成を目指すことを目的とした。ガイドラインのローカライズ化については、継続して次のプロジェクトで進めていく予定である。

4. 研究成果

認知症をもつ高齢者を対象とした緩和ケアに関するクリニカルガイドラインのシ

ステマティックレビューを行った。英文主要データベースのサーチ (MEDLINE, CINAHL, EMBASE, SCOPUS 他) と Grey literature サーチ (MEDNAR, Google Scholar, Dissertation International 他) の結果、154本のガイドラインが特定された。うち、144本が英文、10本が日本語であった。特定されたガイドラインはガイドラインのクリティカルアプレイザルツールである AGREE を使用してエビデンスに基づいたガイドラインとしての質の確認を行った。JBI-NATARI ソフトのデータ抽出ツールを用い、各ガイドラインで提示されているケアの視点に関するデータを収集し、質的なメタ統合を行った。英語論文から抽出されたテーマは “multidisciplinary team approach”, “family support and home care”, “obtaining advanced care planning”, “effective symptom management”, and “quality of life” であった。日本語文献では、輸液や PEG チューブの管理や是非といった、緩和ケアの中の特定のテーマに焦点を当てているものが多く、緩和ケア全体としてとらえた文献は少なかった。結果として、英語文献では包括的な緩和ケアアプローチと個人の特性に沿ったケアを強調している点が特徴的であった。日本語文献の不足という問題の背景には、認知症をもつ高齢者を対象とした緩和ケアについての認識は高まってきた者の、実際のエビデンスの集積・検証や現場での実践へ向けた取り組みが追いついていない状況が推察された。

認知症をもつ高齢者の痛みのアセスメントで使用するベストなツールの特定を目的にアンブレラレビューを行った。最も多くの SR により推奨されたのは、PACSLAC (Pain Assessment Checklist for Seniors with Limited Ability to Communicate) であった。PCSLAC はカナダで作成され、アセスメントの所要時間が5分とクリニカルユーティリティーが高く、Reliability (Cronbach's alpha was high in two administrations) と Construct validity (Park et al. 2010) も高いという結果が報告されていた。PACSLAC の次に推奨されていたのが DOLOPLUS-2 (Zwakhalen et al., 2006) であった。フランスで開発され、最も多くの一次研究で検証されてきている。本レビューでは2つの SR により推奨されていた。しかしフランス語圏での検証が多く、英語文脈やその他の背景でのさらなる検証が求められていた。

ユーザフレンドリーという点において推奨されるツールは、1分でアセスメントを完了できる手軽さなどから Abbey Pain Scale (Schofield et al., 2006)も推奨された。Abbey Pain Scale は日本語でも妥当性、信頼性、ユーティリティの検証が進みつつあり、今後の日本国内で広く検証・使用されていくものと推察される。その他のツールとしては、PAINAD, MOBID-2 など開発・検証が進んでいる。

緩和ケアに関連したアウトカムについてのシステマティックレビューを対象としたアンブレラレビューを行った。認知症緩和ケアの分野においても英語で発表される研究論文の数は年々増加しており検証が進んできている。このため、今回は一次研究ではなく、すでに発表されているシステマティックレビューの傾向と検証されたエビデンスの確認することを目的とした。レビュー対象はシステマティックレビューのみとした。主要英文データベースのサーチ (MEDLINE, CINAHL, EMBASE, SCOPUS 他) データベースサーチの結果から、採用基準に合致するものを選択した。クリティカルアプレイザルは Joanna Briggs Institute が開発した Critical Appraisal Tool for Systematic Review を使用した。結果として、介入研究を対象とした SR (n=3)、非介入の量的研究 SR (n=3)、及び、質的研究 SR (n=7) が特定された。本発表ではプロジェクトの一部である介入研究に限定して報告を行った。緩和ケアアプローチによるケア介入により患者・家族アウトカムの改善がおおむね認められ、認知症患者と家族に対しての緩和ケアの促進が奨励される結果となった。具体的には緩和ケアアプローチを用いたケア提供により、患者・家族の満足度や QOL に対して統計学的に有意な効果が認められたというエビデンスが特定された。認知症患者へのアドバンスディレクティブの活用は、患者本人や家族が望まない延命治療の予防に対して有効であるとのエビデンスが確認された。さらに緩和ケアアプローチは患者の症状の軽減、及び、一般病棟などからのホスピスサービスへの有意に高いコンサルテーション、病状悪化の場面における救急病院への低い転院率といった点に有効であるとのエビデンスが特定された。

家族に限定したエビデンスとしては、緩和ケアアプローチによる援助を受けた家族では、患者の死亡後における有意に高い満足度が認められた。予期悲嘆のリスクグループについての検証では、中度から重度認知症患者の家族、配偶者の介護者などがリスクグループとしてあげられた。また、施設入所させた家族も患者への罪悪感により正常な悲嘆プロセスを辿りにくいというエビデンスが確認された。日本の認知症ケア文脈とは異なるアメリカのケア現場では、アフリカ系やアジア系の認知症患者ではメインストリームのい

わゆる白人層よりも長期間にわたっての生命維持のための延命治療を受けてしまう傾向がみられた。

引用文献

Schofield, P, et al. (2005) Assessment of pain in adults with cognitive impairment: a review of tools. International journal on disability and human development, April 2005.

Park, J, et al. (2010) A review of observational pain scales in nonverbal elderly with cognitive impairments. Research on Social Work, vol.20(6): 651-664.

Zwakhalen, SMG, et al. (2006) Pain in elderly people with severe dementia: a systematic review of behavioral pain assessment tools. BMC Geriatrics, vol.6 (3):1-15.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 件)
投稿準備中

[学会発表](計 3 件)

Rie Konno, Miyae Yamakawa & Mikiko Ito. First JBI model concerning the Best Evidence Project in Japan: palliative care for people with dementia. October 22nd, 2013. Joanna Briggs Institute Annual Convention, (Adelaide Hilton Australia).

Rie Konno, Kang Suehee, Kiyoko Makimoto. A systematic review of the best pain assessment strategies for people with dementia. November 12nd 2014. The 9th Biennial Joanna Briggs International Colloquium (Holiday Inn Atrium, Singapore)

Rie Konno, Miyae Yamakawa, Michito Sakurai. The best strategies to improve palliative care for people with dementia and their families: an umbrella review project. Feb 24th 2017. 1st International Symposium on Health Innovation and Nursing Research. (Faculty of Nursing, Thammasat University Bangkok, Thailand)

[図書](計 件)

[産業財産権]
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：平成 年 月 日
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：平成 年 月 日
取得年月日：平成 年 月 日
国内外の別：

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今野理恵 (Konno Rie)

関西国際大学 保健医療学部看護学科・准教授

研究者番号：10341372

(2) 研究分担者

山川みやえ (Yamakwa Miyae)

大阪大学医学系研究科・准教授

研究者番号：80403012

(3) 研究分担者

牧本清子 (Makimoto Kiyoko)

大阪大学医学系研究科・教授

研究者番号：802626559

(4) 研究分担者

伊東美樹子 (Mikiko Ito)

大阪大学医学系研究科・准教授

研究者番号：80294099

(5) 研究分担者

日野徳子 (Hino Noriko)

関西国際大学 保健医療学部看護学科・助教

研究者番号：60775047

(3) 連携研究者

()

研究者番号